

雜 錄

MISCELLANEOUS

- 早稻田大學法學部の過去總長 高田 早苗
- 奧地利民事訴訟記錄ニ就テ教授 中村 宗雄
- 「ケルゼン」教授新著「一般國家論」
ノ紹介.....講師 中村彌三次
- 遊佐教授博士論文審査報告教授 柳 川 勝 二
- 講師 嘉 山 幹 一

早稻田大學法學部の過去

高 田 早 苗

早稻田大學法學部の過去の歴史と云つても四十年以上も長い歳月にわたる事であるから詳しい事はもとより覚えてゐない。然しながら私は當初からその事を知つて居るべき關係があるに相違ないから臆氣ながら記憶をたどつて大要をお話して見ようと思ふ。

明治十五年に東京専門學校が創立せられた當時に於て、大隈侯や小野梓先生の考は政治部と法律部を設けるといふ事であつた。その外に理科を置くといふ事もあつたけれども、開いて見ると學生が二三人しか入學せないといふ譯でぢきに止めてしまつたのである。當時政治經濟學部の先生は私と山田一郎、天野爲之の兩氏であつた。而して法律部の先生は砂川雄峻、山田喜之助、岡山兼吉の三氏であつた。この三氏は私の同窓でもあり親友でもあり且又小野梓先生を通して大隈侯に紹介した人である。政治部の先生になつた三人は専任として學校を教へたのであるが、法律部の三人は皆辯護士を兼ねる事になつた。そこで給料なども政治部の三人は三十圓づゝ法律部の三人は十五圓づ

といふ事であつた。砂川山田といふ様な人達は私の同窓の内でも頗る學才に富んでゐて内外から矚目されたのである。岡山君は又年齢も大部上であつたが頗る世故にたけてゐて且意志の鞏固な立派な人物であつた。この三人が協力して東京專門學校の法律部、直接に云へば今日の專門部法律科の端緒を開いたのであるが、暫くする内に岡山君以外の兩君は辯護士の店をはつて行くのが頗る困難になつた。それは何の爲であるかと云ふと、當時の幼稚な社會に於ては學問があり過ぎるのと、世故に通じな過るのと、而して資本が極めて薄弱であつた爲であつたと思はれる。それ等の理由から砂川君は止むを得ずして大阪に移る事になつた。爾來同君は大阪に於て辯護士の業を營み、その社會の第一人者として非常な成功を収めたのみならず大阪市政の爲にも大いに盡力し、辯護士會長や市會議長などになつた事も屢々ある。後には代議士に當選した事もあつた。同君は此頃では功成り名遂げて悠々閑日月を送つて居られ、而して我が早稲田大學の維持員として相變らず學園の爲に盡力して居られる。

以上お話した様な次第で法學部の端緒が開け、砂川君去つた後に於ても岡山君や山田君は相變らず熱心に教鞭をとつて居られたのであるが、數年の後に於てこゝに端なくも學校の位置問題が起つたのである。即ち岡山君が主として學校の移轉説を唱へだす事になり山田君等も之に和したといふ次第で、早稲田の如き片隅に於ては到底學校の繁昌すべき見込がないから、之を

神田邊に移さねばならぬといふ議論であつた。この議論は言葉を換へていふと大隈侯の膝下を離れるといふ結果になるので、私共は大隈侯とこの人々との間にたつて大いに迷惑したのである。然しながら到頭議論が纏らないので岡山君山田君等は學校を去つて、増島六一郎、大谷木備一郎、元田肇君等と共に神田に法律學校を開く事になつた。此が今日の中央大學の發端である。この事件については當時色々説をなした者があつた。一面に於ては之は藩閥政府が大隈侯を苦しめる爲の策であつて、要するに東京專門學校を破壊する爲の計畫であると見たのである。他面に於ては之を單に位置問題と見做したのであるが、その何れが真相であつたかは今に至つても分明しないのである。然しイギリス法律學校と稱した今の中央大學の前身に對して政府殊に當時の司法大臣山田顯義伯等が大いに力瘤を入れた事は的確なる事實と見て宜敷い。それは兎に角として東京專門學校の法律部は之が爲に一人残らず講師を失つてしまつたのであつた。學生があつても教師がなければ法律部を潰すより外に仕方がないのであるが意地から云つてもそれは出来ないのである。そこで私は岡山君に就いて「立つ鳥は後を濁さず」といふ事があるから後任の講師を見つけ出す迄は是非留つて貰ひ度いと話して承諾を得、岡山君は自分の世話してゐた澁谷慥爾といふ法學士を連れて來て二人で澤山な時間を持つて教へて呉れたのである。其間に私は四方を奔走して教師を探したのであるが當時法

學士と云ふものは曉の星の數の如くに少いのであつたから、加之有力な法學士は殆んど残らずイギリス法學校の方に加擔してゐた爲め少からず當惑した。こゝに於て私は止むを得ず私の友人であつた關直彦君を頼む事にしたのである。同君は今日に於ては政界の一老將として頗る名の聞えて居る人であるが學生時代に於て私の親友であつた。然るに運命といふものは妙な事になるものであつて、私が學生時代から小野梓先生を通じて大隈侯の幕下に馳せ參じたと同じ様に、關君は大隈侯の政敵伊藤公の機關であつた東京日々新聞に行く事になり、その社長たる有名な福地源一郎君の下になつて日々新聞の論説を書く身分となつた。かう云ふ次第であるから關君と私とは私交は兎に角として政治的には反對な地位に立つたのであるけれ共、段々此方の事情を話して同君に法律部の重なる法律の講師として教へて貰ふ事とし、その他數名の人を頼んで漸く法律部の教授を續けて行く事になつたのである。然しながら此の如き仕組はさう長く續くものではない。何とかして専任の講師を探さなければならぬと考へて種々物色した結果、三宅恒徳といふ法學士と俣野時中の兩君を頼む事になつた。三宅君は三宅雪嶺君の令兄であつて法學士中最も先輩の一人であつた。俣野君は司法省のフランス法律學校を中途で出た人である。どちらも氣骨のある面白い人であつたが、三宅君は惜しい事に規則正しく學生を教へる事が出來難い人であつて常に缺席勝ちであつた。又俣野君は平素

でも覇氣満々たる人であつたが、一杯聞こし召すと少々粗暴になつて、講師として寄宿舍長を兼ねてゐる時の如きは、一杯氣嫌の結果學生の門限以外に歸る者があると暗い處に立つてゐて、木劔だか竹刀だかを持つて殴りつけるといふ次第で到頭兩君共長くその地位を保つ事が出来なくなつたのである。

前に述べた様な法律部の難局も一時の事であつて兎に角一通り講師を揃へる事が出来たが、その後我が法學部に教鞭をとつた人々は中々多い事であつた。然しその内について殊に記憶せねばならぬと思ふ人々は、平田讓衛君、中橋徳五郎君等であらうと思ふ。中橋君は帝國大學の學生時代から法律部を教へられたのであつたが、この人を連れて來たのは同郷の先輩であつたところの三宅恒徳君であつた様に記憶する。中橋君は随分長い間法律部の教師として盡力されたのである。又平田讓衛君は中橋君よりも少し遅れて學校に關係されたが、君は東京大學法學部の最も優れたる卒業生の一人であつて、又我が法學部の爲に長い間専心盡力されたのである。君は當然我が法學部の中心人物となるべき人であつたが、當時の學校は君をして後顧の憂ひなく法律部の爲に盡力せしめるだけの待遇をする事が出来なかつた。爲に君も止むを得ず大阪に行かれて辯護士となりその方面に於て大成功を收められた。君は今尙大阪の辯護士中に於て最も優れたる地歩を占めて居られるのである。又君と早稻田學園とは前に述べた様な關係であるから、今日に至るまで相變ら

す學園の爲に盡されつゝある。その他我が法學部の爲に、その昔特に骨を折られた講師の人々の名前を二三あげて見れば、板屋確太郎、中村忠雄、片山清太郎君等の名前をあげる事が出来る。

板屋君は早稻田の出身で米國ミシガン大學で法律を修めた人であり、中村君もその友人で同じくミシガン大學の出身であつた。この兩君は専任講師として法學部の爲に盡されたのである。又その當時に於て他に職務を持つて居られながら我が法律部を教へた人々としては、磯部四郎、伊藤悌次、高橋捨六、江木衷、三崎龜之助、朝倉外茂鐵君等の名前をあげる事が出来る。奥田義人君は中央大學の關係者であつたが我が早稻田の爲にも長い間教鞭をとられたのである。

以上は早稻田大學の創立以來明治二十一二年頃までの事であるが、その後に至つて鳩山和夫博士が我が學校の校長となられ、然して同君は東京大學の法學部に於て最も古い教授の一人であり、大概の法學士はその薰陶を受けたといふ關係上、我が法律部も大部便宜を得て講師などを依頼するについても餘り不自由を感じなくなつた。その後になつて私が大學計畫實行の衝にあたり、東京專門學校を早稻田大學とする事となつたについて、何より先に教員養成といふ事をせなければならぬ爲に、數名の留學生を各部から派遣したのであつた。當時鹽澤昌貞君は政治經濟學部、金子馬治君は文學部、然して法學部からはその出身者の一人たる阪本三郎君を獨逸に派遣したのであつた。同君

は歸朝に際して同じく法學部の出身であつた池田龍一君を伴つて歸られ、この兩君が爾來法學部の爲に少からず盡されたのである。然してそれと相前後して鈴木喜三郎、小山溫、牧野菊之助等の諸君が我が法學部の爲に教鞭をとらるゝ事になり、その内鈴木小山の二君は司法省の命によつて海外に視察される時に、我が早稻田大學も多少の應援をしたといふ關係から、一層深く法學部の爲に力を致されたのであつた。當時に於ける私の方針は、東京帝國大學の如き學校の關係者でなく學校を離れて法律的工作にあたつて居られる人を得度いといふところから、専ら司法省裁判所の方々を招聘したのである。今日に於ても法學部に司法省關係の諸君が多いのはそれ等の事に原因すると云つても宜敷いのである。扱て又次の時代はどうかと云へば、寺尾、遊佐、中村萬吉の三氏を學校が洋行をさせてこの人々が我が法學部の中心となつた今の時代に外ならない。之は現在の情態であるから別に詳しく説くの要はないが、然しながら我が法學部が一つの學部として他の學部と寸毫も遜色なく學生の數も高等學院までも數ふれば二千といふ數に達する事になつたのは、全く之等三氏及びその後に洋行して歸られた諸君が中心となつて、脇目も振らず我が法學部の爲に盡さるゝ爲であると云ふても差支へない。尤も之等比較的少壯の専任教授以外に、他の方面から學問と經驗を兼ね備へらるゝ諸名家が來つて教鞭をとり、我が法學部の爲に力を致さるゝ功勞は決して没する事は出来ない

のである。又中村進午博士の如きは久しきに涉つて法學部に教鞭をとられたのみならず、法學部長として長い間盡力された。その功勞は決して忘るべからざる次第である。

以上述べた所が我が早稲田大學法學部の過去の變遷の大體である。前にもお斷りした如くに私は極めて健忘的であるのみならず、加ふるに参考書類もないのであるから、お話しした事は頗る疎略であるのみならず、事實の違ひもある事であらうと思ふ。たゞ私が終に臨んで一言し度い事は、前に述べた如く私はこの早稲田の法學部の爲には随分過去に於て心配したのであるが政治學部や文學部と比較するとその發達が頗る遅々たる感があつた。その理由は中心たるべき専任講師を久しく得る事が出来なかつたといふのに原因するのであるけれ共、それが往々にして誤解されて、私が法律科に對して不熱心であるとか、政治科を揚げて法律科を抑へるといふ様に思はれて、頗る迷惑を感じたのである。又法律科の爲に骨を折るとすれば無論嘴を入れねばならぬが、それが私が干涉する様に思はれた事もないとは云へぬのである。然しながらこれも殆んど過去の事であつて、今日に於ては我が法學部に我が學園の出身者たる中心人物を數多得る事が出来て、その基礎が確乎不拔となつたのみならず、將來に於て大發展をなすべき見込が充分に表れてゐる事を、私は衷心より悦ぶのである。云ふまでもなく法學といふものは大學の根本學科の一である。世界に始めて大學なるものが生れた

時から、西洋に於ては神學法學及び數學といふものが根本學科になつてゐた。さう云ふ次第で法學は最も大切な學科であるのみならず、大學の歴史に照して見ても他の應用的學科等に比較して見れば一步先に完備せねばならぬものであるから、我が法學部が、多年にわたる苦心の結果又多數の教授講師の方々の過去に於ける御盡力の結果、今日の盛況を示すに至つた事は、我が學園にとつて深い意味のある事であり、苟もこの學園に關係ある者は深く喜ばねばならぬ事である。(大正一四、九、一七)